

昭和 47 年用(昭和 46 年 9 月末)

東京工業大学  
窯業同窓会会員名簿

付 会誌第 11 号

窯業同窓会

〒152 東京都目黒区大岡山  
東京工業大学  
近藤研究室内  
電話 03-726-1111  
振替口座 東京 196855 番

御 挨拶

会長 山内 俊吉

大野政吉さんの御逝去は、本同窓会にとって非常に大きな不幸でありました。大野さんが長年にわたり本同窓会の会長として、会員の親睦並に相互協力のために大きく貢献されましたことに対しては会員の方々と共々心からの感謝を捧げたいと思います。

大野さんは、事に当っては用意周到、何事も達成せねばやまぬ英知と実行力の持主で企業の上からまた学協会その他の諸団体の活動を通して窯業の発展、国力の進展に大きく貢献された偉大な卒業生の一人でありました。

今春の同窓会の総会においてこのような名会長のあとを受けて、私が会長に選ばれましたことは、誠に光栄ではありますが何となく重い責任を感じずる次第であります。

本同窓会はしだいにその会員数を増し会員の活躍も顕著であることは皆さん御承知の通りであります。この時にあたり私の微力ではいかんと

も出来ませんが幸い立派な副会長、幹事の方々の御支援にたよりつつ努力を重ねてゆきたいと思えます。どうか会員の皆様方の御協力、御支援によりまして何とかこの重責が果せまますよう念願し、ここによろしく御願い申しあげるしだいでありませぬ。

本同窓会の仕事は今後ともだいたい今までの大野会長の路線を踏襲することになりますが、時の流れにしたがい会員の皆さん方の御意見をききつつ、副会長、幹事の方々とも相談し企画をねり少しでもよりよい運営が出来るようにと願っておりますので会員の方々から忌憚のない本会発展への建設的な御意見をおもらし下さいますよう御願いたします。そして御互に手をとりあって激動の 1970 年代に対処してゆきたいものと思えます。皆さん方の御健闘と御協力を切に御願いたします。会長就任の御挨拶といたします。

昭和 46 年 8 月 27 日

## 窯業同窓会規約

1. 本会は窯業同窓会と称する。
2. 本会は会員相互の親睦を図り窯業界の向上発展を期するを以って目的とする。
3. 本会は事務所を東京都目黒区大岡山 東京工業大学内に置く。
4. 本会は第1条の目的を達成するために左の事業を行なう。
  1. 窯業技術懇談会
  2. 見学会
  3. 名簿の発行
  4. その他幹事会において必要と認めた事業
5. 本会々員は東京工業大学窯業関係者を以て組織する。
6. 本会の経費は、会員その他よりの事業寄付金、その他の収入をもって支弁する。  
会計年度は毎年四月に始まり翌年三月に終る。
7. 本会は毎年度始めに総会を開き下記の事を行なう。
  1. 会務の報告
  2. 役員の変更
  3. 規約の改正
  4. その他
8. 本会に左の役員をおき任期は二ケ年とする。但し再選は差支えない。
  1. 会長 1名
  2. 副会長 5名
  3. 幹事 若干名
  4. 常任幹事 5名
9. 会長、副会長および幹事は総会で選出する。常任幹事は幹事の互選とする。
10. 会長は本会を総理し、副会長は会長事故ある時、代行する。常任幹事は会務（庶務、会計）を処理する。  
幹事は本会の重要事項を審議し、常時地方各職場並びにクラス等の状況、移動および本会に対する意見等を通報するものとする。
11. 本会は相談役をおくことができる。相談役は役員会において推薦し、総会において承認をうる。
12. 本会に支部を置くことができる。支部は本部と連絡を密にし、本会の発展に協力する。  
(昭和46年4月27日総会において一部改正したもの)

\*\*\*\*\*

## 叙勲授章その他

この二年間に叙勲、授章あるいは受賞された方々のお名前を記し衷心よりお祝いを申し上げます。

山内 俊吉氏 (大13) 勲二等旭日重光章 44年11月3日 無機材質研究所所長  
内藤 義一氏 (大10) 勲四等瑞宝章 44年11月3日 浅野スレート(株) 監査役  
倉田 元治氏 (大14) 藍綬褒章 45年4月1日 旭硝子(株) 社長  
石塚 正信氏 (大11) 勲四等瑞宝章 45年11月3日 石塚硝子(株) 社長  
佐藤 三平氏 (元教官) 正七位, 勲六等瑞宝章  
原 幾久氏 (大6) 勲四等瑞宝章 46年4月29日 日新黒鉛耐火会長  
斉藤 進六氏 (教官) 大河内賞 東京工業大学教授  
梅田 夏雄氏 (昭20) " 日本化学陶業(株) 専務取締役  
大井 修一郎氏 (昭20) " 同上  
竹内 稔氏 (昭21技) " 同上  
各務 鉦三氏 (大5) 窯業協会功労賞 45年4月

小柳 勝蔵氏 (元教官) " 45年4月  
若林 滋氏 (大12) " 45年4月  
上田 滋徳氏 (大9) " 46年4月  
角田 頼保氏 (昭3) " 46年4月  
水地 満徳氏 (大15) " 46年4月  
宗宮 重行氏 (昭27) 窯業協会学術賞 45年4月  
梅田 夏雄氏 (昭20) 窯業協会技術賞 45年4月  
田辺 三郎氏 (昭4) " 45年4月  
尾野 勇雄氏 (昭12) " 46年4月  
杉浦 正敏氏 (昭14) " 46年4月  
猪股 吉三氏 (昭35) 窯業協会進歩賞 45年4月  
牧島 亮男氏 (昭43修) " 45年4月  
井関 孝善氏 (昭44博) " 46年4月

今後ますますの御活躍をお祈り申し上げます。また、調査もれがあるかと存じますが、お許しいただきたいと存じます。お気付の方は何とぞお知らせ下さいますようお願い申し上げます。

## 学 位 授 与

東京工業大学における論文提出による博士号の授与は、まず旧制については全学 791 件中無機材料関係は昭和 9 年小柳勝蔵氏の第 1 号, 14 年山内俊吉氏と真田義彰氏の 4, 5 号, 17 年の吉井豊藤丸氏の 14 号に始まり 66 件に及んでいる。次に新制は昭和 37 年に始まり、現在までに全学 480 件中無機材料関係は 23 件となっており比較的少なく、次の各氏に授与されている。

号	氏名	日付
4	森本孝治	37. 3. 21
13	佐藤純夫	38. 2. 13
14	稲生謙次	38. 2. 13
32	赤尾洋二	38. 12. 11
36	大庭 宏	39. 2. 12
63	山本準之助	39. 12. 9
67	天笠道雄	40. 1. 27
83	林 応極	40. 5. 12
92	下平高次郎	40. 10. 27

93	新居善三郎	40. 10. 27
106	加藤誠軌	41. 2. 23
109	木村 勲	41. 6. 22
153	川田尚哉	42. 7. 12
189	今井久雄	43. 5. 8
208	斉藤勝一	43. 12. 11
209	西野 忠	43. 12. 11
220	大塚 淳	44. 3. 19
223	前沢秀憲	44. 3. 19
250	崔 相 紘	45. 3. 20
259	中村哲朗	45. 6. 17
280	松本 修	45. 12. 16
301	浅野駿吉	46. 6. 16
302	植田俊朗	46. 6. 16

さらに大学院課程博士は昭和 33 年に始まり現在まで全学 316 件、そのうち無機材料関係は昭和 37 年滝沢一貴氏の第 33 号に始まり 29 件となっている。(近藤連一記)

\*\*\*\*\*

## 故大野政吉会長を悼む

山 内 俊 吉

私共の敬愛的であった大先輩、本同窓会々長、大野政吉さんが昨年の 7 月 31 日午前 9 時 30 分、東京の大橋にある東邦大学付属病院にて 86 才を一期とし、忽然として永眠されました。誠に哀悼の到りであります。



大野政吉先生

御承知のように、大野さんは頗る御元気で誰れしも百才近い寿を保たれるだろうと信じていました。昨年春の大阪での同窓会総会には私は妻の死のため出席出来なかったのですが、大野さんは、いつもの通り元気な御姿で、出席されたものとばかり思っていました。あとでききますと軽い肺炎症状で安静を保っておられるので別に心配はないとのことで安心していました。

その後、某氏から脳軟化症状で入院され意識も明らかでないときき、驚いてさっそく病院に御見舞いいたしました。奥さんが『山内さんですよ』と幾度か強く叫ばれましたので深い眠りからさめたように目を見開かれましたが、間もなく静かな深い眠りにつかれました。今さらのように御病

気の重大性を知り、悲しみがこみあげてきました。それから約 10 日位して訃報に接し病院にかけつけましたが御苦しみの表情もなく静かな自然の眠りにつかれたような温和な御顔でした。

ごく親しかった私でさえ、このようなしだいでしたから、ほとんどの同窓の方々は何も知らないうちに訃報に接せられたわけで、それだけ御驚きも一入であったことと思います。誠に残念の到りでした。

大野さんは明治 39 年御卒業後ただちに農商務省工業試験所に御入所、その後 1 年半ばかりして当時、未開発であった窓硝子製造を目指して新たにできた旭硝子株式会社に技術の最高責任者として就職されました。それからわずか 2 年後にはベルギー式手吹法による窓硝子の製造を完成され、引き続き同社の要職を経て昭和 14 年社長御退任まで 30 有余年の長きにわたり、わが国板硝子工業の発展ために全力をあげて奮闘され今日の隆盛に導かれた功績は実に偉大であり、大野さんの一生は、わが国板硝子工業の生きた歴史でもありました。

また窯業協会、板硝子協会、アンモニアソーダ工業会などの会長あるいは理事長、諸会社の取締役、東京工大、九大、九工大等の講師、その他一々

ここに述べ得ないが、このように業界、学協会の発展のためにも大きく貢献されました。

以上のような数々の功績に対して昭和15年には緑綬褒章、そして昭和42年には勲三等旭日中綬章、受賞の栄に浴せられたのであります。

そのほか東京工大の瓢箪池の上にあるワグネル先生記念碑の建設の時の御奮闘、窯業協会70周年記念の会館建設に際し会長並に建設委員長として募金のために全国を行脚し文字通り骨身を削っての御奮闘は多くの人々の脳裏に強くきざみこまれていることでしょう。

大野さんは用意周到、不屈不撓の精神に充ちた実行力のある非凡な技術者経営者であり、全く仕事の鬼という言葉がぴったりするようなきびしさの反面、仕事を離れると極めて謙虚で権威ぶらず、ユモラスなところがあり、世の中を知りつくしたような方で人情を解し、人々に接する態度は柔軟であり、温情に充ち、総ての人々に敬愛される人徳の人でありました。

本同窓会々長として長年にわたり同窓の懇親と窯業人相互の切磋のために心をくばられ後輩の指導誘掖につとめていただいたことに対しては、改めてここに心からの感謝を捧げねばなりません。

大野さんの御逝去は同窓会に大きな淋しさをあたえました。しかし本同窓会には藤岡幸二さん、伊奈長三郎さん、鮎川武雄さんその他元気な諸先輩が多いので心強い次第ですが、多分これらの長老方に対し『大野の分までも後輩の指導をよろしく頼む』というのが大野さんの心ではないかと思うのであります。大野さんどうぞ今後とも同窓会の発展を御守り下さい。

私はここに大野さんが同窓会のために御つくり下さった多くの御心労に心からの感謝を捧げつつひたすら御冥福を御折り申しあげる次第であります。

(昭和46年8月28日)

\*\*\*\*\*

## 故辻晋六君を悼む

藤岡幸二

京焼陶芸界の一重鎮辻晋六君が11月1日京都赤十字病院の一室でむなしく不帰の客となられた。惜しい人を失った。齢満65才、これからが本当に君に期待するところが大きかっただけに陶芸界の損失と失望は限り知れないものがある。



辻 晋六先生

君は明治38年9月京都洛北の名邑雲ヶ畑に呱呱の声をあげたのである。雲ヶ畑は山深く水清き山紫水明の仙境で明治時代皇室の御猟場にも指定された山林で古く皇居の建造には、この地の材木が使用されたという由緒深い土地であり、波多野家は其地の名門で当時狩猟に来られる名将頭官の宿泊所に当てられた家柄であった。辻君はその波多野家の四男坊として生れ、自然に恵まれた環境にはぐくまれて生長したのであった。小学校を卒えて京都市の南方東寺の近くにある京都府立第二中学校に入学寄宿舎に入って五年間を過した。京都二中は全国中等学校野球優勝大会（現在の高校野球大会）の第一回大会に見事優勝して全国に名を知られた名門校で自由豁達、質実剛健な教育で知られた中山再次郎校長の下に君は成長して人格を構成した

様であった。学業のかたわら柔道に親しみすでに初段の腕前であったという。学校の寄宿舎から約四里余りの生家へは毎週土曜の午後帰り翌日曜の午後また寄宿舎へ帰ったが当時だからもちろん徒歩で往復したものである。

中学教育を卒えて東上東京高等工業学校窯業科に入学三年間の修学を終えて実社会に出たのであるが、在学中学業の余暇音楽に親しみ、チェロに巧みだった。また中学時代からの柔道も忘れずに講道館にも通って三段に進んでいたということである。

社会に出てからは一時京都市立第二工業学校の窯業科の先生をつとめて育英につとめ、また実際社会の事情にも通じる様になり、大戦前大陸進出熱の盛なりし頃、志を立てて満州に進出吉林省で製作に従事、大いに期する処があったのであるが、戦雲急を告げるにおよび涙をのんで満州を引揚げ京都に帰って東山山麓の陶芸地蛇ヶ谷に居を構えて陶芸に親しむ事になったのである。

君の作陶は工芸品から厨房用品、雑器などかなり幅広く展開された。君は作陶のかたわら伝統工芸の研究、中国陶磁の研究等にも励み、油滴天目、木葉天目等の見事な作品を始め、千段巻、櫛目模様押上げ技法等色々の新技法を案出して業界に君臨し、個展を開いて世の批判を問うた。官展公募展等には余り進んで出品せなかったが、それでも多くの賞を得た。また外国にも君の声価は高く

フランス、イタリア等にて展覧され、イタリアでは博物館に常置展示されているとの事である。

君は性、極めて温順、人に交るに厚く教うるに親切で多くの徒弟にも親まれていた。一面権門に阿ねらず毅然として一家風を樹てて譲らず、晋六陶芸の技の豊かさを誇っていた。尚君は工房製作のかたわら業界の事に煩をいとわず奔走し清水焼デザイン研究会、京都クラフト協議会などの会長を務め、また日本工芸会ロータリークラブなどの会員としてもつくされたことは交友の広さを物語るものであった。

君はまた地方陶業界にもよく指導に出かけられた。ことに福井県には度々足を運んで親しくつくされ、また九州地方へも度々出かけて補導されるなどわが国業界のために残された爪あとは少なくないのである。また君は度々中国にも視察旅行を敢行し彼地の古き伝統を探るなど、誠に幅の広い知識人であった。

昨年初秋より病を得て元氣なく糖尿病の診断をうけて静養、食養生にもつとめたのであったが快方に向わず、ついに本年晩夏の頃赤十字病院に入院闘病生活に入ったのであったが、病は肝臓を侵して癌の発生を見るに至って万事休止 11 月 1 日昇天するに至った行年 65 才。

葬儀は 11 月 12 日洛東鹿ヶ谷の名刹法然院で厳に行なわれた。この法然院は法然聖人閑栖の旧蹟で俗塵を離れた清浄な京都らしい浄域であって、院主は晋六君と因戚関係にあるところから晋六君は古くからこの法然院の一室に展覧会（個展）を開いた処である。晋六君はこの法然院の墓地に

眠ることであろう。

晋六君の残された業績はその作品と共に燦としてとこしえに輝き、晋六陶房は令息勘之君がすでに立派な陶芸家として存在していられるので何等の憂なく榮えて行くであろうを思えば君もって瞑すべきなりである。

蔵前学舎が生んだ異彩ある陶芸家、京焼のほこる一重鎮を失った事は斯界の為に誠に遺憾なことであるので敢えて拙文を綴って君の冥福をお祈りする。



魚紋ノ花瓶  
辻 晋六作

\*\*\*\*\*

## 訃 報

この二年間にお亡くなりになりました同窓の方々のお名前を記しまして、謹しんで哀悼の意を表します。

沢村 滋郎 大正 15 年卒	寺岡 三郎 昭和 19 年卒	勝田 恵一 昭和 28 年卒
大野 政吉 明治 39 年卒	上田 鈴夫 昭和 22 年卒	中野 義雄 大正 10 年卒
十時 一雄 昭和 5 年卒	辻 晋六 昭和 6 年卒	名和 二郎 昭和 3 年卒

\*\*\*\*\*

## 昭和 45 年度総会と懇親会

昭和 45 年度の総会と懇親会が、4 月 23 日、大阪、淀屋橋の大新楼で開催された。時、あたかも大阪、千里が丘において万国博覧会開催中であり、オープン後月余にてその様子ようやく世に脛炙せんとする頃であった。

日なお暮なずむ午後 5 時 30 分総会に入り、議長若林氏選出の後、倉田副会長の挨拶、引続いて会務報告として、庶務関係を浜野、会計関係を小坂両常任幹事が行なった。続いて卒業 50 年を迎

えられた大正 9 年卒の方々、石井恒、飯塚 誠厚、上田滋穂、嘉悦 新、高野 忠、平野寛治、石井喬の諸氏に記念品として島岡達三氏（浜田庄司先生門下、日本民芸協会所属、昭和 16 年卒）製作の飾皿が贈られ、上田氏が代表で受領、挨拶をされ、50 年の重みのあるお話しに万場の拍手を浴びた。

次期役員については、会長 大野 政吉、副会長 鮎川武雄、石塚正信、山内俊吉、倉田元治、森谷太郎、常任幹事は庶務 近藤連一、浜野健也、会

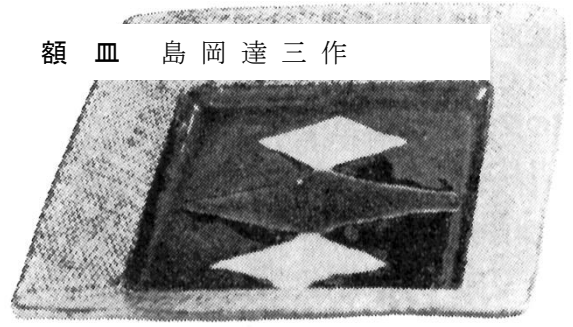


計 小坂丈予、名取賢荘が担当として本年度に引続き全員留任することになった。引続き紛争その後の大学の現況が田賀井教授によって報告され総会を終了、直ちに全員記念撮影の後懇親会に移る。

出席者 46名、藤岡先輩を筆頭に卒業年度、明治1名、大正6名、昭和20年以前18名、昭和21年以降16名、先生方5名の多彩に亘り、亀井氏司会の下になごやかに進行し、何分万博の折とて“人類の進歩と調和”も話題になりつつ歓談笑声絶えず、予定時刻を過ぎて同8時前万才を三唱して盛会裡に閉会した。

(伏野勅明記)

額 皿 島岡達三作



額 皿 島岡達三作



昭和45年度総会 (於大阪)

\*\*\*\*\*

## 昭和44年度収支決算報告書

### 収入の部

収入総額	840,574円
(内 訳)	
前年度繰越金	99,460円
事業寄附金	142,900円
昭和44年度総会懇親会費	104,000円
名簿広告料	494,000円
預金利子	214円

### 支出の部

支出総額	581,637円
(内 訳)	
昭和44年度総会懇親会費	112,424円
卒業50年記念品代(9名)	29,228円
昭和45年度総会・懇親会通信費	27,240円
名簿印刷発行費	406,615円
振替為料手数料	2,700円
通信費	3,350円
雑費(ノート)	80円
差引残高(明年度繰越金)	258,937円

## 昭和 46 年度総会と懇親会

46 年 4 月 27 日午後 5 時半から、東京の日本都市センターで行なわれた。総会は近藤幹事司会のもとで、森谷副会長の開会の辞によって始められた。まず昨年 8 月 1 日なくなられた大野前会長をはじめ物故会員の方との御冥福をお祈りして黙祷をささげた後、仮議長に森谷副会長を選出し議事に入った。浜野幹事からの会務の報告、小坂幹事からの会計報告を異議なく承認した。ついで山内前副会長を、満場一致で新会長にお願いすることに決定し、新会長の就任挨拶の後、議長を新会長に交代し、引続き議事を進めた。まず、同窓会規約に、第 11 条として「本会は相談役をおくことができる。相談役は役員会において推薦し、総会において承認をうる。」の項を挿入する件について承認、つづいて役員会の推薦によって、藤岡幸二氏、鮎川武雄氏を相談役をお願いする件を承認した後、次期役員として副会長に石塚正信氏、倉田元治氏、森谷太郎氏、江副勇馬氏を承認、常任幹事は、会長が交代したので前年度に引きつづき留任としたことで、庶務に近藤、浜野、会計に小坂、名取の四幹事が留任することとなった。

ついで恒例の卒業五十年の方々に対する記念

品の贈呈が行われた。大正 10 年 御卒業の方々、臼井芳一氏、後閑文之助氏、斉藤元良氏、内藤義一氏、森下一郎氏、山田精吾氏、横溝政太郎氏、山崎享氏の 8 人のうち、後閑、斉藤、内藤、山田の 4 氏が出席された。まず山内会長から諸氏の簡単な紹介があった後、同窓で日展審査員の加藤鈔氏の作品「蒼釉 華器」を記念品として贈呈した。ついで卒業五十年の方々を代表して、山田精吾氏の挨拶があった。ここで司会を名取幹事に交代して懇親会に移った。山内新会長の挨拶の後、藤岡相談役の音頭で乾杯、諸先輩のスピーチ、卒業五十年の記念品の製作者の加藤 鈔氏のお話し、卒業五十年の方々の思い出、今年度卒業した新会員の自己紹介など倉田副会長さし入れもあって飲物も豊富でにぎやかに会がつづき、遂々定刻もすぎ止むなく 8 時半盛会のうちに散会した。

今年の懇親会は役員会の決定によって新会員（新卒業生）は会費無料となったため、6 名の出席があり会のにぎやかさを増してくれたようである。なお、当日の出席者は 80 名であった。

(浜野健也記)

\*\*\*\*\*

## 昭和 45 年度収支決算報告書

収入の部		支出の部	
収入総額	419,937 円	支出総額	207,220 円
(内 訳)		(内 訳)	
前年度繰越金	258,937 円	懇親会費用	139,075 円
事業寄附金	50,500 円	卒業 50 年記念品代	18,145 円
昭和 45 年懇親会費	110,500 円	葬 祭 代	20,410 円
		文 具 代	100 円
		通 信 費	1,690 円
		為 替 代 金	200 円
		45 年度懇親会用葉書印刷代	27,600 円
		差引残高次年度繰越金	212,717 円

\*\*\*\*\*

## 昭和 44 年度事業資金寄附者芳名 (10 号記載以後分)

3,000 円	堀 口 順 康				
2,400 円	藤 村 善 登				
2,000 円	村 瀬 六 郎	真 保 義 郎			
1,000 円	延 義 之	宮 内 準五郎	開 田 高 生	坂 田 正	
	水 池 満 穂	杉 浦 孝 三	原 幾 久	大 庭 宏	
	伊 藤 正 三	吉 武 素 水	勝 田 恵 一	十 時 一 雄	

500 円	羽田晃治 小山藤夫 内山義一 関口淳 小柳道男 小林弘資 中村邦好 中川宇一 岩佐島宏 小泉善之 巽昭夫	日浦致 江藤哲夫 飯塚常太郎 川村久爾彦 池田卯一 内山浩勝 大牟礼純一 中村内三男 大寺門常次 寺水廣 清尾征	鈴木保雄 名取賢莊 洪谷益男 中西誠治郎 丸山礼三 山本登 柘植信雄 川上辰男 厚見昌弘 加藤健造 高橋紘一郎	菊池光治 条川長次郎 日笠泰行 稲村泰 保野福太郎 堅田尚 原和照 田中真夫 山本孝彰 佐沢光夫 和泉正光
合計	50,400 円			

\*\*\*\*\*

## 昭和 45 年度事業資金寄付者芳名

10,000 円	上田滋穂	倉田元治							
2,500 円	梅田夏雄								
2,000 円	田上嘉秋								
1,000 円	各務取賢三	坂田正行	加藤政良	境野照雄					
	川順吉	日笠泰行	尾関良	飯塚誠厚					
500 円	横溝政太郎	角田穎保	加藤正之	桧山真平					
	池ノ上典助	田代敬徳	中藤連一	油田内稔					
	村原直輝	浅田屋弘	近藤幸雄	竹田俊一					
	桑野健也	土屋勅宏	遠藤中勝	矢田部正治					
	浜井四郎	伏野野宏	山古丸	荒谷川秀夫					
	北村丈予	清水岡昭	齐藤進	武司秀吉					
	小坂村	沢岡	奥田	猪股					
合計	50,500 円								

——寄付のおねがい——

皆様の御援助で会の財政もまずまず黒字をつづけておりますが、印刷費その他、値上がりしておりますので、なるべく数多くの方々から事業資金の御寄付をおよせ頂きたく金額は1口、500円、名簿代を含め2口1,000円以上で、何卒よろしくお願い致します。



## 大岡山通信

### 第 7 回 Dr. G. Wagener 記念公開 学術講演会

昭和 44 年 9 月 26 日、午後 2 時より約 2 時間に  
わたり、学園紛争の関係もあって窯業協会 2 階会  
議室において開催された。

本年は、東京にて開催された第 10 回国際粘土  
会議に出席のため来日されたペンシルバニア州  
立大学教授 G. W. Brindley 博士に「粘土および層  
状珪酸塩鉱物の研究の進歩」と題する講演をお願い  
した。名実ともに粘土鉱物結晶学の世界的権  
威者である同教授により、粘土-有機物複合体な  
どの研究を中心に層状珪酸塩鉱物の結晶構造的  
研究の最近の進歩の状況が平易な英語で解説紹  
介され、その興味深い講演に来会者一同深い感銘  
をうけた。会場には山内、末野両先生を始め多数  
の方々が参会下さり、着席できず立って聴講され  
る人が見られるほどの盛会であった。なお G. W.  
Brindley 教授は昭和 36 年 2 月より約半年間客員  
教授として本学にて教鞭を執られ、本会会員にも  
旧知の方が多く、閉会后再会をよろこび合う風景  
があちこちで見受けられた。（宇田川重和記）

### 第 8 回 Dr. G. Wagener 記念公開 学術講演会

昭和 45 年度の第 8 回 Dr. G. Wagener 記念公  
開学術講演会は 12 月 11 日（金）午後 2 時から 5  
時まで、東京工業大学第 413 講義室において開催  
された。

今回の講師は、大阪大学産業科学研究所、森本  
信男教授で、森本教授は「不定比酸化物、硫化物  
の結晶構造と安定性-特に V-O 系と Fe-S 系につ  
いて」と題し、約 70 名の聴衆を前に V-O 系酸化物、  
Ti-O 系酸化物などについて約 2 時間、Fe-S 系な  
どについて約 30 分講演された。

V-O 系、Ti-O 系の酸化物は、本学においても関  
心のある方々が多数みえて、きわめて興味ある話  
題であり、討論も活発に行なわれ、出席者に多大  
の感銘を与えた。（宗宮重行記）

### 学 内 情 報

時計塔を仰ぐ本館前広場の樹々にはやくも秋  
の気配を感じる今日このごろ、同窓の諸兄にはま  
すます各方面に御活躍のこととお慶び申し上げ  
ます。早いもので、日本中を大学紛争の嵐が吹き  
すさんだ 2 年前、前号を送り出しましたが、それ  
から 2 度目の秋をむかえ、授業もまったく正常化  
して、久しぶりに大岡山には昔にかわらぬ学園の  
生活がもどって来ています。



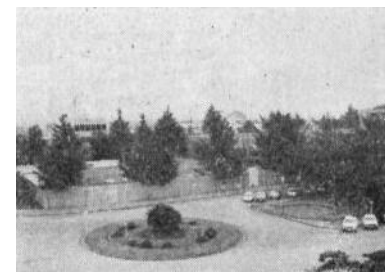
建設中の新中棟



新食堂玄関前



新 食 堂



情報処理センター建設現場

しかし、この 2 年の間に、無機材料関係教官の  
間にはいくつかの変化があつて幾多の新鋭がわ  
れわれの陣営に加わつたのは心強い限りです。さ  
し当り、現在の陣容はつぎのとおりです。

### 無機材料工学科

(講座名)	(教授)	(助教授)	(助手)	(技官)	(事務官)
窯業学第一(珪酸塩物理化学)	川久保	加藤	太田(京)・水谷		川口
窯業学第二(焼成)	素木	宇田川	大津賀・井川		平崎
窯業学第三(熔融)	境野	—	山根・牧島	山本	
地質鉱物学	山田	小坂	浦部・太平	平林	
材料加工学	近藤	—	後藤・大門	大沢	
工場	—	—	林	大矢・中	
共通施設	—	—	北沢		

### 工業材料研究所

(部門名)	(教授)	(助教授)	(助手)	(技官)
基礎計測	竜谷	浜野	篠原・秋山	堀田・内藤
固体物理	岩井	—	森川	坂井
無機焼成材料	田賀井	木村	安田	小片
無機熔融材料	佐多	中村	吉村・笹本	太田(達)
化学冶金	佐藤	星野	畑野・宇都宮	秋山
超高温材料	斉藤	宗宮	沢岡・平野	吉永
合成無機材料	清浦	今井	黒沼・伊藤	上西
複合材料	後藤	小池	安藤・田中	鈴木
工場	—	—	小磯	唯野・石井
共通	—	—	多田	—

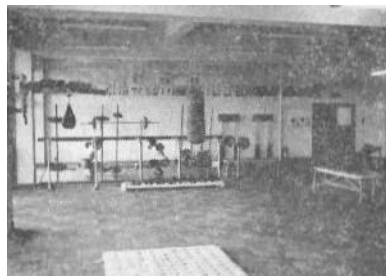
### 原子炉工学研究所

(部門名)	(教授)	(助教授)	(助手)	(技官)
原子炉設計理論	鈴木	—	井関	長谷

(但し関係部門のみ)



社工棟(旧向獄寮跡)と遠く本館時計台新中棟を望む



武道館内トレーニングセンター

いちばん大きな変化は工材研の近藤連一教授が新たに増設された材料加工学講座の担当として学部に移られたことで、長い間、4講座で運営されてきた学部として、はなはだ心強い次第です。また工材研では、竜谷先生が教授に昇任されたほ

か、5人の新鋭が助教授として新任され、そのほか、水谷、井川、牧島、大門、安田、吉村、笹本、宇都宮、平野、田中の諸氏が助手として新しく仲間に加わって、一段と陣容が強化されました。

他方、学部第2講座の新氏と第3講座の滝沢氏がそれぞれ東工試と新潟大学工学部応用化学科へ栄転してゆかれました。両氏の今までの学科に対する貢献に対しては衷心から感謝するとともに、今後の御健闘を祈っています。

大岡山のキャンパスも、大きな変貌をとげようとしています。まず目につくのは本館裏に高く組み上げられた鉄骨の威容で、昭和47年秋に完成する10階だてのこの新中棟には電気、電子、電子物理の3学科が納まります。また線路に沿った道路わきには2階だての大学食堂がほとんど完成しています。これは上下で2000平方米余、階下は700人位を入れる大食堂で、2階には喫茶室や小食堂などがあり、桜並木をひかえ、西側にはプールの眺めもあるしゃれたものになります。本館前の広場東側には、さらに二つのビルが並びます。本館に近い方が情報処理センターとよばれるもので、最新型の電子計算機Hitac 8700(その他)とその端末機器が入り、あらゆる計算や、解析およびプロセス・コントロールなどの研究に威力を発揮する予定で、昭和47年1月から業務を開始し

ます。もう一つのビルは新しい図書館で、この方は遅くとも昭和 47 年度には着工します。

もう一つの大きな話題は長津田キャンパスです。これは大岡山を通る田園都市線で 30 分ばかりの、東名高速道路横浜インターチェンジに近い 5 万坪余の土地で、起伏の多い変化に富んだ緑地です。ここに大岡山から工業材料研究所、精密機械研究所、資源化学研究所、天然物化学研究施設、印写工学研究施設が移転する予定で、すでに池を囲んでこれらの建物を配列した設計図の完成を

みています。長津田キャンパスにはさらに新しい大学院大学も設けられる予定です。

母校も、このように年ごとに変容をとげていますが、現在の大学内の全容を紹介すると、つぎのようになります。

この会誌がお手許にとどく頃は、大学の銀杏並木の下はかさかさとする黄金色のじゆうたんが敷きつめられているでしょう。やがて来るきびしい冬にそなえて同窓の皆様にはますます御自愛の程を。  
(境野照雄記)

(1) 学 部

区分	類	学 科	学年定員	
理 学 部	第 1 類	数 学 科	20	
		物 理 学 科	25	
		化 学 科	40	
		応 用 物 理 学 科	34	
工 学 部	第 2 類	情 報 科 学 科	40	
		金 属 工 学 科	24	
		有 機 材 料 工 学 科	20	
	第 3 類	無 機 材 料 工 学 科	11	21
			10	
		化 学 工 学 科	33	
		合 成 化 学 科	34	
		高 分 子 工 学 科	34	
	第 4 類	電 気 化 学 科	34	
		経 営 工 学 科	9	34
機 械 工 学 科		25		
第 5 類	生 産 機 械 工 学 科	65		
	機 械 物 理 工 学 科	34		
	機 械 物 理 工 学 科	34		
第 6 類	制 御 工 学 科	17	34	
	電 気 工 学 科	17		
	電 子 工 学 科	39		
計	第 5 類	電 子 物 理 工 学 科	34	
		土 木 工 学 科	34	
		建 築 学 科	57	
計	第 6 類	社 会 工 学 科	34	
		計	779	

(2) 大 学 院

専 攻 名	学年定員(概数)	
	修士課程	博士課程
数 学	12	3
物 理 学	14	7
化 学	20	10
応 用 物 理	18	6
金 属 工 学	19	7
繊 維 工 学	15	5
無 機 材 料 工 学	94	30
化 学 工 学		
合 成 化 学		
高 分 子 工 学		
応 用 電 気 化 学	36	3
機 械 工 学		
生 産 機 械 工 学		
機 械 物 理 工 学	19	2
制 御 工 学	18	4
経 営 工 学	18	3
電 気 工 学	42	7
電 子 工 学		
電 子 物 理 工 学	18	2
土 木 工 学		
建 築 学		
社 会 工 学	25	10
原 子 核 工 学	18	
原 子 核 工 学	8	4
計	430	78

## 昭和 18 年卒クラス会

昭和 40 年に名古屋の会以来 5 年経過。万博の年、窯業協会年会在大阪で行われたのを機会に関西で計画された。

窯業同窓会が毎年、窯協年会的第 2 日に行われていることをうっかりして日が重なり、本当にすみませんでした。幹事の方や先輩、後輩の皆さんに深くお詫びします。

恩師では、河嶋先生、山田先生が、ご多忙のご日程をさいてご出席下さいました。クラスメートは、九州、東京からもはせ参じ、16 名中 12 名出席。

亡くなられた先生方、同輩の靈に黙禱を捧げたのち宴に入り、久しぶりに学生時代の思い出に、仕事のこと、将来のこと、話はつきず、春の宵をびわ湖西岸の雄琴温泉で満喫。今回は、なるべく早く東京で計画することを決め散会。

終りに、ご臨席頂いた両先生に厚くお礼を申しあげるとともに、恩師の先生方がいつまでもご壮健であらせられることを祈ります。

(奥田記)

